

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2024 春号

104

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

白岩丹生神社本殿の 保存修理工事



本殿の竣工状況（南西からみる）



身舎正面の彫刻欄間



和歌山縣有田郡鳥屋城村小川
 丹生神社本殿正面欄間部

引用：天沼俊一博士のスケッチ “国立国会図書館デジタルコレクション”

特集 白岩丹生神社本殿の保存修理工事

一、沿革と修理内容

有田川町に所在する白岩丹生神社の創始については明らかではありませんが、白岩山東麓の白岩谷の溪流に面していた社地を明応五年（1496）に現在地へ遷したと伝えられています。本殿は一間社春日造という形式で、屋根は檜皮で葺かれています。残存する棟札のうち、明応五年棟札と永禄三年（1560）棟札が建立年代を示すと考えられるもので、文化財指定時には本殿（表紙写真上段）の装飾が桃山時代に共通の特徴を持つことから永禄三年建立と推察されています。建立以来、修理が繰り返されるなかで、明治初年に塗装の洗い落としを行い、拝殿建築時の明治四十年に周辺の岩壁をはつり、本殿の位置を後退させた際に、浜縁等の修理が行われています。その後、昭和三四年に国庫補助事業による解体修理が行われ、屋根や小屋組が当初の姿に復原されました。

今回の保存修理事業では、檜皮屋根葺替、



写真1 白岩丹生神社本殿全景 (修理前)



写真2 本殿の藻類清掃作業状況 (背面東側)

軒先や縁廻りの木部補修、木部表面に繁茂していた藻類の清掃及び背面岩盤のはつり工事を令和四年度から二ケ年にわたり実施しました（写真1、2）。藻類清掃はアルコール消毒薬を噴霧し、ブラシや筆を用いて、彩色の痕跡の有無を確認しつつ慎重に清掃作業を進めました。このような作業を木造建築で試した事例がなかったため、本殿に使用する薬剤の候補を三種類選び、文化財保存科学の専門家に助言をもらうことにしました。その結果、表面に残存する顔料への影響がエタノールと同程度で、より殺菌力のあるイソプロパノール

ルを選択することに決めました。まず、所有者の許可を得た上で、本殿同様に藻類が繁茂する境内建物で、薬剤の希釈濃度を変えながら素木部分での効果を二カ月間ほど経過観察しました。また、塗装部分の経過観察については取替が必要な軒まわりの解体材を利用しました。本殿の藻類清掃作業が完了し現れた部材表面は、以前の塗装掻き落としの傷や昭和修理時の木材の表面の加工もあり、彩色の痕跡を見つけにくい状態でしたが、断片的に確認ができた彩色の痕跡については記録を取りました。工期の後半においては、周囲に迫る岩壁のうち、降雨時に跳ね返りが顕著な箇所のはつり工事を実施しました。

二、本殿の特徴について

明応と永禄の棟札のいずれからも「天王寺工匠」との関わりを示す記載が認められます。本殿において最も特徴的なのは身舎正面の意匠で、頭貫を虹梁形とし、内法長押を枕捌に納めて、鴨居と頭貫の間に彫刻欄間を入れます（写真3）。既往の研究では、このような意匠が大阪府下で伝播していたと言われています。天王寺工匠が関わった社殿の様式が、四天王寺流という寺社設計の流派の基盤となったと考えられ、室町時代後期に南大阪



内法長押：枕捌

写真3 白岩丹生神社本殿の身舎正面上方

彫刻欄間



写真4-2 旧竹房神社本殿の身舎正面上方



写真4-1 東田中神社境内社旧竹房神社本殿の全景

や和歌山で成立していたとされています。身舎正面の意匠が類似する社殿として和歌山県指定の東田中神社境内社旧竹房神社本殿（以下、旧竹房神社本殿、紀の川市、写真4）や重要文化財の加太春日神社本殿（和歌山市）などが挙げられます。

三、旧竹房神社本殿および積川神社本殿との比較

旧竹房神社本殿は、一間社隅木入春日造の社殿で室町時代末期から桃山時代に建立されました。白岩丹生神社本殿の修理事業と並行して屋根葺替・塗装工事を実施してまい

した。これらに関する文献を探したところ、戦前から戦後にかけて活躍した天沼俊一博士が、両社殿の彫刻欄間について現地調査したことを記した紀行文に辿り着きました。天沼博士は、和歌山においても多数の建築を調査しており、白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿（写真4-1、2、9を参照）の彫刻欄間について、菊唐草の透彫を配している共通点に着目し、「此等二種の菊の透彫を比べてみるに、太い茎が前後に重なりあって刻んだのである。即桃山へ入ってから欄間が急に厚くなつたのではなく、室町から其傾向があつたことが判るであろう」との見解を述べていま

す。

旧竹房神社本殿の建築に関わった大工は明らかになつていませんが、白岩丹生神社本殿と並行して事業を進めるなかで、他の部分でも天王寺工匠の作例と共通点を見つけることが出来ました。わかりやすい白岩丹生神社本殿との共通要素として、背面頭貫木鼻の形状が挙げられます（写真5）。類例には、慶長八年（1603）建立の積川神社本殿（大阪府岸和田市）があり、輪郭と絵様の渦の特徴は細部に差異があるものの同系統の可能性を示しています。

その三社での意匠の関連性は、向拝水引虹梁木鼻でもみられます（写真6）。白岩丹生神社本殿の向拝木鼻は、先端を尖らせる尖頭型と呼ばれる種類に区分されます。この木鼻輪郭の曲線から反転して渦を巻き込む絵様が発展した形が、積川神社本殿の木鼻と言えます。また、旧竹房神社本殿においては、丸彫りの龍頭に発達しています。

さらに、身舎頭貫木鼻においても、それぞれに鳥兜状木鼻の上部に若葉状突起が付くなどの共通点が認められます（写真7）。

墓股でも、彫刻主題につながりを感じます。積川神社本殿の墓股には、白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿、両方の要素が含まれてい

旧竹房神社本殿の背面側頭貫木鼻は、東西で先端部の形状と絵様渦の巻き方向が異なる。

西面の先端部形状の方が白岩丹生神社本殿、積川神社本殿の木鼻に類似する。東面の木鼻については、時代差などの要因を検討する必要がある。



旧竹房神社本殿（身舎西面背面側）



白岩丹生神社本殿（身舎西面背面側）



旧竹房神社本殿（身舎東面背面側）



積川神社本殿（身舎側面）

写真5 身舎頭貫木鼻の比較

るのが興味深い点です。正面幕股の主題については、三社とも尾長鳥・松を配しています（積川神社は三間社流造で当該箇所は北の間、写真8）。白岩丹生神社本殿と積川神社本殿の身舎正面では幕股の脚先や上方の実肘木も類似しています。旧竹房神社本殿と積川神社本殿は、木の葉に筆や貝類の主題が共通しています（写真11）。

これらの共通点を確認した上で、改めて天沼博士が興味を示した彫刻欄間を比較しました。白岩丹生神社本殿の彫刻欄間は、竹の節付透彫欄間を嵌めます。竹の節間の彫刻欄間は椿、菊、犬枇杷を主題としています（表紙写真中段）。旧竹房神社本殿の欄間の位置に、現在は横板を嵌めています。取り外されて保管されていた彫刻欄間を確認しました（写真9）。旧竹房神社本殿の彫刻欄間の意匠は、竹の節を入れずに連続させ、両端部に繰形表現を使用しています。この繰形と似た表現は積川神社本殿の脇障子に認められます（写真10）。

以上、白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿、積川神社本殿に焦点を当てて比較を行い、それぞれに共通した特徴を持つことを確認しました。このうち、旧竹房神社本殿の詳細な建築年代は明らかになっていません。旧竹房神社

本殿と積川神社本殿の建立された時代の前後関係には検討の余地を残しますが、彫刻の特徴から積川神社本殿を白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿を結びつける存在と捉え、彫刻の写真は本稿では白岩丹生神社本殿、積川神社本殿、旧竹房神社本殿の順に並べて掲載しました。

四、おわりに

今回、白岩丹生神社本殿と旧竹房神社本殿の両方を担当する機会に恵まれ、天王寺工匠をキーワードに幾つかの共通点を確認することができました。

比較対象として紹介した三社殿以外にも、同様の特徴を有する社殿が和歌山県や大阪府に多数存在しています。誌面の関係で取り上げることができませんでしたが、それらを含めて、当センターの紀要で紹介したいと考えていますので、興味を持った方は、そちらも読んでいただけたら幸いです。

（大給 友樹）

参考文献

天沼俊一「日本古建築細部五題補遺」『史跡と美術16』1946
『重要文化財積川神社本殿修理工事報告書』大阪府教育委員会 1957



白岩丹生神社本殿（向拝）



積川神社本殿（向拝）

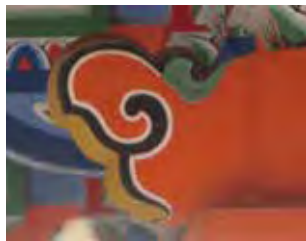


旧竹房神社本殿（向拝）

写真6 向拝水引虹梁木鼻の比較



白岩丹生神社本殿（身舎側面）



積川神社本殿（身舎背面）



表面（木の葉に筆）



見返し

旧竹房神社本殿（身舎背面西側）

写真7 身舎頭貫木鼻（側面）の比較



白岩丹生神社本殿



積川神社本殿



旧竹房神社本殿

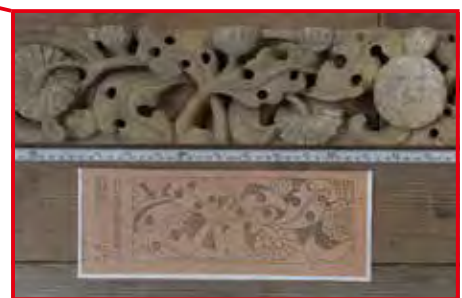
写真8 身舎正面臺股の尾長鳥彫刻の比較



写真9 旧竹房神社本殿の彫刻欄間（彫刻主題は菊）



写真10 積川神社本殿 南側脇障子の彫刻欄間（表側の彫刻主題は菊）



旧竹房神社本殿の彫刻欄間と天沼博士のスケッチの比較



旧竹房神社本殿（身舎西面：貝類）



（身舎南妻：貝類）



（身舎北妻：木の葉に筆）

積川神社本殿

写真11 旧竹房神社本殿と積川神社本殿の「貝類」と「木の葉に筆」



岩橋千塚古墳群寺内地区の

発掘調査

全国有数の古墳群として知られる岩橋千塚古墳群、その南部に岩橋千塚古墳群寺内地区と呼ばれる古墳群があります。また、この寺内地区の中には弥生時代から中世までの集落跡の相方遺跡も所在します。今回は近畿農政局から依頼を受け、岩橋千塚古墳群寺内地区の南西端で、相方遺跡に隣接する部分を発掘調査しました（図1）。



図1 調査地位置図

調査は令和5年7月10日から一時中断期間を挟みつつ11月8日まで行いました。調査地の現状は道路及び水路と果樹園です。調査地は南にある丘陵先端部に位置しています。

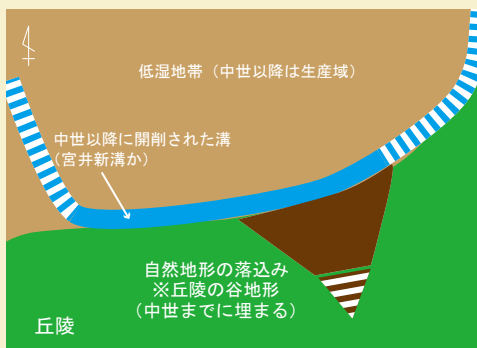


図2 調査地周囲の状況（模式図）

した（写真1）。これらの遺構からは古墳時代後期から古代の土器が出土し、この時期に人々が斜面地を利用していたことが分かりました。

次に、丘陵が小さく谷状に開いた部分に黒褐色のシルト質土が堆積した、自然地形の落込みが見つかったことです。この自然地形の落ち込みの埋土は大きく上層と下層に分けることができ、下層からは古墳時代後期から古代の遺物が、上層からは中世の遺物が出土しました。この自然地形の落ち込みは古代以降に一度下層の部分が埋まり、中世に上層の部分が

発掘調査の結果、次のようなことが分かりました（図2）。
まず、調査地南側丘陵の傾斜が比較的穏やかな部分に多数の土坑や小穴が掘り込まれていま

埋まったと考えられます。

最後に、現在は道路となっている調査区北側は大きく攪乱された状態でしたが、出土した遺物や土層の観察から現在の水路に先駆けて東西方向に延びる大型の溝が中世に掘られていた可能性が出てきました。現在の農業用水路は、中世、日前宮が土地開発に伴って開削した宮井新溝を前身にしていると考えられており、この大型の溝が宮井新溝である可能性が高いと考えます。

今回の調査では古墳の痕跡は確認できませ



写真1 土坑・小穴完掘状況（北から）

んでした。遺物や遺構から、調査地は古墳群の一部というよりは、隣接する相方遺跡の影響を強く受けていると言えそうです。

（濱崎 範子）

当課の主要な業務である、文化財建造物の保存修理工事は、当県でも明治後期以降継続して実施されて来ています。昭和62年発足の当センター、その前身になる(社)和歌山県文化財研究会、これら財団が設立される以前は、技術者(現在の設計監理者)と職人などが全国の修理現場を渡り歩いてきた時代です。そのうちの一人である竹原吉助氏は、昭和戦前期から当県で活躍されました。主な現場だけでも廣八幡宮(18〜19、29)、鞆淵八幡神社(19〜22)、東照宮、野上八幡宮(32〜35)、高野山徳川家霊台、道成寺、高野山不動堂、等々多くの寺社で保存修理工事に携わられています(括弧内数字は昭和年号)。鞆淵八幡神社の修理は、終戦時に継続されていた全国3現場の一つでした。昭和33年からは当県の文化財専門審議会委員に就任され、同47年度には文化功労賞を受けておられます。

筆者もこれまで金剛三昧院(45号・51号ほか)、長保寺(56号・61号)、熊野本宮大社(55号・59号ほか)、寶來山神社(72号)、那智山青岸渡寺(86号)、須賀神社(100号)等、本紙でも紹介してきた建物を通して大先輩の足跡や建物への気遣い等を体感させて貰っています。昨年の廣八幡宮での小修理でも「昭和二十九年修補」の焼き印に出会い、敬意をこめて臨んだ次第です。(下津 健太郎)



寶來山神社の本殿(平成期の修理中)
→昭和46〜47年の修理では、正面の妻飾(ツマカザリ)を痕跡に基づいて慶長期再建時(1614年)の姿(奥)に復原し、江戸時代中頃に改変された部材(手前)は屋根内に保管されていました。



廣八幡宮の拝殿(縁まわり修理中)
→縁を支える隅扱首(スミサス)という部材には「昭和二十九年修補」の焼き印が押されていました(写真の丸囲み箇所)。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

『日本霊異記』下巻第6縁「禪師の食はむとする魚の化して法華経と作りて、俗の誹を覆しし縁」では、大和国(奈良県)の吉野山に病気になった高僧がおり、治療のため栄養のあるものを食べたいと言っているので、弟子が紀伊国の海辺まで出向き、魚を買って籠の中に隠して持ち帰ろうとします。しかし途中で信徒に僧侶が魚を買ったのではないかと疑われ、無理やり籠の中身を見られるのですが、魚は法華経に変わっていました。仏に仕える僧侶の奇跡に、信徒は己の行いを深く恥じたことが書かれています。

さて、このお弟子さん、大和国から紀伊国の海辺までどうやって移動したのでしょうか? 昔のことですから徒歩や馬、舟が考えられます。そしてこの時代、都のある大和から紀伊国まで「南海道」と呼ばれる道路が整備されていました。

中国に倣い、律令国家の体制を整えようとしていた奈良時代、都のある大和に向かって日本各地に道路が作られました。紀伊国を横断していたものを南海道と言いますがどこを通っていたのか、現在でも様々な説があります。これまでの文献や遺跡の位置などから紀



写真1 川辺遺跡で確認した南海道の溝?

の川の北岸を通っていたことは明らかです。そして、平成4年に当センターが川辺遺跡を発掘調査した際、この南海道に伴う側溝の可能性が高い溝を確認しました(写真1)。

どんな時代のものでも、道路やそれに関係する遺構と断定できるものを発掘調査で確認するのはなかなか難しいものです。ですが見つけた道を古代の人々が歩いていったんだと考えると、なんだかワクワクしませんか?

(濱崎 範子)

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報(2024年春～2024年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展 黒江・商家のくらしと漆器 2024年3月16日(土)～6月16日(日)
- 展示講座①「春期企画展」 2024年4月14日(日) 13:30～15:30

和歌山県立博物館

- 企画展 新収蔵品展 2024 2024年2月23日(金・祝)～4月14日(日)
- 特別展 紀伊東照宮の宝刀 2024年4月27日(土)～6月2日(日)
- 世界遺産登録20周年記念特別展 聖地巡礼－熊野と高野－
第1期「那智山・那智瀧の神仏－熊野那智大社と青岸渡寺－」
2024年6月15日(土)～7月21日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展 花鳥風月－和歌山市立博物館収蔵品展－ 2024年3月16日(土)～5月12日(日)

高野山霊宝館

- 令和5年度冬期平常展「密教の美術～祈りの龍姿～」(後期)
2024年3月5日(火)～4月14日(日)

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細や講座の受講方法については各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙
- 2 特集「白岩丹生神社本殿の保存修理工事」
- 6 埋蔵文化財課 短信「岩橋千塚古墳群寺内地区の発掘調査」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(3)」
「埋蔵文化財課 『日本霊異記』と和歌山(4)」
- 8 催し物案内

風車104 (2024・春号)

令和6年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID: @942tjyhk

